

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	太陽の子町田駅前保育園
施設所在地	東京都町田市原町田6-17-8クオーレ1階
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

1. 活動のテーマ

<テーマ>

感覚あそび～五感を使った遊びを通して一人ひとりの『好き』を知る～

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

クラスの半数以上が新入園児であるため、個々の好きな事、物、遊びについて知る機会が必要だと感じた。そして、個々の好きを日々の保育に取り入れ、一人ひとりが満足いく毎日を過ごせるようにしていきたい。という思いがスタッフの中で増していった。初めて行う遊び、特に初めての感覚に対して消極的な児もおり、少しずつ体験していく機会の大切さを感じていた。子ども達が初めての事にどんなふうに反応し、友だちやスタッフとのかかわりの中でどんな探求をみせるのかを観察し、さらに子どもたちの経験を広げてみたいと思ったのでこのテーマにした。

2. 活動スケジュール

【テーマの設定】

1歳児の感覚の基礎が育つ時期に、1年間のテーマとして感覚を設定することで、子どもたちの感覚が成長することを狙って、テーマの設定とした。項目ごとに子どもたちに経験してほしいこと、楽しんでほしいことを担任間で洗い出して活動のスケジュール調整を行う。

【①：色と水で遊ぶ】

6月：色水で遊ぶための玩具・物品の購入。

〈6月〉12日色探し 18日ジュース作り 20ポディーペインティング

〈7月〉9日氷遊び 17日水遊び初日 24日スズランテープ遊び 25日鼻紙遊び 30日泡遊び

〈8月〉13日洗濯遊び 15日色泡遊び 18日色水ジュース作り 22日ダイラタンシー
25日フィンガーペイント

〈9月〉5日色水遊び 11日ポディーペインティング 24日ソルトマラカス

〈11月〉26日色探し 28日絵の具遊び（ローラー・スポンジ）

〈12月〉2日Tシャツ着用

【②：食べ物とにおいて遊ぶ】

〈10月〉20日お弁当バス 23日お芋ほりごっこ

【③：音で遊ぶ】

〈11月〉13日鈴遊び

〈12月〉3日落ち葉の音 4日鈴遊び 11日鈴遊び 12日落ち葉の音

〈1月〉15日楽器遊び（フルーツマラカス、鈴）

【生活発表会で色遊び・音遊びを発表する】

12月：生活発表会でこれまで活動した色遊び・音遊び活動を披露。

自分たちで作ったTシャツを着用し、発表会で発表した。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）

〈色・水〉・・・スズランテープ、花紙、画用紙、絵具、ポディーソープ、食紅、バンダナ、
カラーセロハン、ペットボトル、ジッパーバッグ、寒天

購入品・・・透明バケツ、バラエティーペイントセット、食紅、寒天、ポディーソープ、
カラーセロハン、ブルーシート

・購入品を使って、色遊び、色水遊び、泡遊びなどを行った。

〈食べ物・匂い〉・・・ペットボトル、土、サツマイモ、片栗粉、小麦粉、塩

購入品・・・塩、片栗粉、小麦粉、米粉、ジッパーバッグ、クレヨン

・購入品を使って、感触あそび、ソルトマラカス作りを行った。

〈音〉・・・鈴、ピアノ、どんぐり、落ち葉、カプセル

購入品・・・フルーツバスケットシェイカー、ベルハーモニーデスクタイプ

・購入品を使って楽器あそびを行った。いろいろな曲で子どもたちが工夫して楽器を鳴らしていた

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

<色・水>

まだ言葉が出ない児が多い中、色に着目し活動を行い「赤」「青」等の言葉を知る機会を作った。絵本「どんないろがすき」を読み合わせしたところそこから子ども達の興味ที่広がり、遊びの中で「色探し遊び」が繰り返されるようになった。

最初は、スタッフが「〇〇色だね」と知らせていたが、子ども同士で「おんなじ」「〇〇色!」と仲間集めをするようになった。子ども達の色への興味の広がりを感じて、絵の具や花紙、色のついた泡遊び、寒天遊びなど感触あそびも色からつなげていった。「ベタベタ」「ふわふわ」など、スタッフが代弁して言葉にしていたことで、語彙が増え、名詞だけではなく、「〇〇な△△」などと表現するようになった。7月になり、水遊びが開始になったタイミングで水に触れ、絵の具や食紅で色を付けた水、ボディーソープで作った泡等段階を追いながら感触を味わった。

色遊び活動は当初、夏の期間中の活動として想定していたが、子どもたちが一番興味を示したため、年間を通して中心的な活動となった。初めは、赤や青などのわかりやすい色から始まった色遊びも、秋の紅葉遊びでは「茶色」「これ、赤?茶色?」と葉によって微妙に違う色に気が付く姿も見られ、色とともに匂いや音にも気が付いていった。

<食べ物・匂い>

日々の給食でも、「みかんの匂い、いい匂いだね。」「甘いにおいがするよ」などの声掛けを行い、匂いの認識を促した。遊びの中では、塩や片栗粉などの感触が水を入れることで変化していく様子を体験した。感触を嫌がる児も何回か繰り返すうちに嫌がらずに参加するようになっていった。

最初のうち、触りたがらなかったり、触ってもすぐに手を引いてしまう児もいたが、友だちが遊ぶ様子を見たり、夏から続いている感触のオノマトペに興味を示し、段々に慣れて、遊び込む姿が見られた。芋ほりごっこでは、土の湿った感触やサツマイモの重みや皮のザラザラとした感触を体験した。

<音>

公園でたくさんの落ち葉を踏みしめる音や、触ったときに出る音をスタッフと一緒に聞き、「どんな音かな」と問うと、耳を澄まして聞き、「ガサガサ」「カサカサ」と答える姿があった。このスタッフの「どんな音かな」の問いから、お散歩中にも「踏切」「カンカンカン」「あ、救急車の音」などと音探しをしながら歩く姿が見られるようになっていった。お部屋でも玩具を振ってみたり、ビニール袋を丸めてみたりと子どもたちが音を探しては聞いて、聞いて。というようにスタッフのところに教えに来る姿も見られた。鈴やフルーツマラカス、デスクタイプのベルを出し、音楽に合わせて好きに鳴らして遊ぶと、初めは本当に好きなように鳴らしていた児が、だんだんかかっている曲に合わせてようになっていった。

<発表会>

一年間続けてきた色と音の活動を発表会でぜひ保護者に紹介したいと思い、テーマとして設定。夏に行っていた色の活動につなげ、「どんないろがすき」の歌に合わせて歌いながら楽器を降って遊び、その姿を発表会で保護者に見ていただき活動を共有した。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

<色・水>

絵具を使った活動に対して消極的な児は、手に絵具がつくことや冷たい感触に拒否反応を示すこともあった。フィンガーペイントやボディーペインティングを行う前のワンクッションとして、ジッパーバッグ越しにフィンガーペイントを行った。手が直接触れないことへの安心感からか、何度か触れるうちに触り方がダイナミックになっていく姿も見られた。その後、直接絵具に触れる活動を何度か繰り返して行うことで苦手意識があった児も、スタッフと一緒に指先だけ、手のひらだけ、足の裏等、段階を追いながら少しずつ自ら触ることができた。

スタッフが絵具や花紙、スズランテープ等を出す際「これは赤だね」「青だよ」等、一色ごとに繰り返し伝えていくことで、冬にはスタッフの「どんな色が好き?」「何色?」の問いかけに対し自ら「赤!」「黄色!」と答える姿が見られた。

<食べ物・匂い>

普段食べている料理に含まれている片栗粉や塩を直接触る機会がなかったため、初めて触れるときは恐る恐る触る児や、嫌がる児がいた。片栗粉をそのまま触った後、水を入れてダイランシーを行い感触が変わると驚き、また恐る恐る触る姿が見られた。一度目では触れることができなかった児も別日に同じ活動を行うことで、スタッフと一緒に少し触ってみる体験をすることができた。ダイランシーを触り、「とろとろだね」「ぎゅっ」等とスタッフと一緒に会話も楽しむきっかけとなった。

園行事の芋ほりでは、土や芋の感触以外にも、匂いを嗅いでみた。匂いを言葉で表現することはできなかったが、あまり嗅ぐことのない匂いに触れる機会となった。

<音>

地域の公園に行き、たくさんの落ち葉を踏んだり、上から舞い散らせた時の音を知った。落ち葉で何度も遊ぶうちに、遊びの中で「ガサガサ」「バサー!」と自ら声を出す児もおり、落ち葉の音が身近な音になっているように感じた。時々、手につく落ち葉の切れ端や砂を気にして手を見つめる児もいた。

楽器遊びでは、園物品の鈴以外に、今回購入したデスクタイプのベルやフルーツマラカスを用いて思い思いに音を奏でて遊んだ。また、ただ鳴らすだけではなく力いっぱい鳴らしたとき、静かにならしたときの音の大きさの違いを感じる活動も行った。力いっぱい鳴らす際は表情が笑顔に、小さく鳴らすときは表情が真剣になっており、運動機能と表情が繋がる姿が見られた。音の活動を保護者向けの発表会に繋げ、『どんな色が好き』の歌に合わせて合奏を行った。遊びの中で繰り返し行うことで、あまり言葉を発さなかった児も「赤」「青」等の色を元氣よく言うことができるようになった。普段の保育活動でも町中の色を見つけて「赤い車」「青あった」等、会話の幅が広がるきっかけとなった。

<発表会>

例年であれば子どもたちが緊張や不安からステージに自信を持って立つことができないことが多いのだが、年間を通して活動を遊びこんだため、みな自信をもって発表会に望むことができた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

今回のすくわくプログラムの活動前は、初めての活動や感触に対して消極的な児が多くいた。また、保育活動において好きな遊びを見つけることができず幅広い活動を行うこと、子どもたちの「好き」を見つけることをねらいに今回の活動を行っていった。

以前はスタッフが「一緒にやってみよう」、「一緒に触ってみる？」等の声掛けを受けても嫌がる姿を見せていたが、夏から冬にかけて幅広い活動を行ったことで、少しずつ活動への興味を持ち意欲的に参加する児が増えてきた。特に水や色の活動では、「冷たい」、「ふわふわ」、「ペタペタ」、「あわあわ」、「バシャバシャ」等、感触と言葉が一致する姿が出た。絵具を直接接触することに消極的だった児も色水遊びや色泡遊び、ボディペインティング等活動を重ねていくうちに、冬には意欲的に絵具を使った制作へ参加する姿が見られた。また、音の活動で行った「どんな色が好き」の歌、楽器遊びも相まって、色を言いながら絵具制作を楽しむ姿が見られるようになった。スタッフが「絵具やるよ」、「鈴遊びしよう」と声をかけたときに、夏と冬では子どもたちが意欲的に活動へ取り組む姿に大きく違いが出た。

言語習得のこの時期に様々な感触活動を行ったことで、子どもたちにとって良い刺激となり活動の幅が広がったとともに言語数も増えたように感じる。また、手についた絵具や泡、片栗粉などを静かに見つめる姿も見られ、何かを感じる姿が見られていた。その感じたことを自発的に言葉にできるように、今後も感覚遊びを積極的に行い、感情や言葉の幅を広げること、一人一人の「好き」が増えることに繋がるような保育をしていきたい。